

ロシア史における大オルダ

中 村 仁 志

はじめに

本稿であつかう大オルダとは、15世紀から16世紀はじめにかけて存在したタタール人の一勢力である。15世紀にキプチャク汗国が分裂するなか、その領土のうちにノガイ・オルダ・クリミヤ汗国・カザン汗国など一群の継承国家が成立していくが、それらのうちで筆頭の地位を占める存在とみなされたのが、ほかならぬ大オルダである。

ロシアの歴史において大オルダの名前は、何よりもまず、「タタールのくびき」¹⁾の最後の段階で生じた「ウグラの対陣」におけるロシアの敵主として現れる。1480年、大オルダの支配者アフメト（アフマート）汗の率いる軍勢がロシアにむかって進撃し、モスクワの南方を流れるオカ川の支流のウグラ川の河畔に達した。これを迎え撃つべく進発したモスクワ大公イヴァン3世の率いるロシア軍もウグラ川の対岸に陣を張り、アフメトと対峙するかたちとなった。タタール軍とロシア軍はウグラ川をはさんで対陣をつづけたが、結局、両者のあいだに戦端が開かれることはなく、アフメトのタタール勢は、ウグラ川のほとりから撤退した。この出来事が、13世紀にはじまり2世紀半のながきにわたってつづいた「タタールのくびき」の終焉をもたらしたとされる「ウグラの対陣」である。

「ウグラの対陣」は、ロシア史において特筆大書に価する画期とみなされており、専門書はもとより、概説の類にあっても必ず言及される重要事項である。とはいえ、ロシア史上屈指の意義をもつ出来事の方の主人公であったにもか

かわらず、大オルダがたどってきた歴史そのものは、従来あまり関心を集めてきたとは言い難い。2010年に『大オルダ 概史』²⁾を著したトレバヴロフは、キプチャク汗国の末期ないしその解体後にジョチのウルスの地に生まれたアストラハン汗国、カザン汗国、クリミヤ汗国などのタタール人諸国家については多くの研究が存在するが、「この点で、大オルダは今のところ、例外をなしている」³⁾という。

ロシアとタタールの関係史にあっては、研究者の関心は、何よりもまず、「ウグラの対陣」を契機とする「タタールのくびき」の終焉⁴⁾に向けられており、歴史叙述のなかでは大オルダはほとんどつねに、「強国となりゆくモスクワの姿を描くにあたっての、一種の背景としての役割を演じている」⁵⁾のであった。

しかしながら、いかなる国、勢力も、勃興する新興勢力の引き立て役になるためにのみ存在したわけではない。モスクワの敵役としての大オルダの姿は、あくまでこの国の一面、それもロシア国家の側から見た一側面をあらわしているにすぎない。

キプチャク汗国の解体がすすみ、東ヨーロッパの国際秩序が大きく変わっていくなかで、大オルダは依然として、諸国間のパワーゲームにおける中心的なプレイヤーの一つであり、状況の変化に対応しつつ存続をはかろうとした。大オルダには、この国なりの存立のしかた、追求しようとした独自の利害があったのであり、それらを念頭におきながら、歴史上の存在としての大オルダとは何ものであったのかを、その始まりの時期に焦点を当てながら検討していくとしたい。

1 大オルダの起源

1502年、メングリ＝ギレイ汗にひきいられたクリミヤ汗国のタタール勢が大オルダを襲い、汗シェイフ＝アフメドに壊滅的なダメージを与えた⁶⁾。一般的には、この出来事をもって大オルダの滅亡とみなされている。大オルダの終焉にかんしては、このように定説があるのと対照的に、そのはじまりについては、研究者の見解はさまざまに分かれており、そもそも大オルダの最初の汗

とみなすべき人物にしてから、ウルク＝ムハンマド、クチュク＝ムハンマド、サイド＝アフメドの三人の名前が挙げられている⁷⁾。

三者のなかで、もっとも早く草原地域の支配者の地位についたのは、ウルク＝ムハンマドであり、1419年にキプチャク汗となった。以来、ウルク＝ムハンマドは、汗位をめぐる内部抗争がたえなかったキプチャク汗国において、次々とあらわれるライバルたちとの争いを繰り返しながら、約20年にわたり断続的に汗の地位にあった。

長らくつづいたウルク＝ムハンマドの支配を最終的にくつがえし、1437年（ないし1438年）に、キプチャク汗国の首都サライの主となって、汗位を手中にしたのがクチュク＝ムハンマドである。サライを追われたウルク＝ムハンマドは一族郎党をひきつれて北方に去り、新たな隣人となったモスクワ大公と干戈を交えては苦杯をなめさせながら、ヴォルガ川の中流の都市カザンを拠点とするタタール人国家カザン汗国を建設した。

この二人のムハンマドと同時代人で、彼らとは別に自身の遊牧国家をつくりあげたのがサイド＝アフメドである。サイド＝アフメドと彼がひきいた部衆は強盛をもって知られており、その動静は北方のロシアやリトアニアにおいても大いなる関心の的であった。

ウルク＝ムハンマド、クチュク＝ムハンマド、サイド＝アフメドの三者が、それぞれどのように大オルダの生成とかかわってきたのかを考えるにあたっては、まず、その前提として、大オルダとは、いかなる環境のなかで成立したのか、とくにキプチャク汗国がどのような状況にあったなかで生まれたのかを検討していかなければならない。

キプチャク汗国が14世紀に設立されて以来、東方のカスピ海北岸から西方の黒海北岸にかけてひろがる広大な草原地域＝キプチャク草原の遊牧民たちはキプチャク汗の威令に服してきた。キプチャク汗国は15世紀になると解体の道をたどり、チングス汗の血統者を君主として戴くいくつもの継承国家へと分裂していく。それらの国家の君主たちのなかで、みずからキプチャク汗の後継者であるとたのみ、また周辺諸国からもしばしばそのように見られたのが大オルダ

の汗であった。

キプチャク汗国およびその継承国家に君臨した汗たちの遠祖は、もともとチンギス汗の長子であったジョチ（ジュチ）にさかのぼる。彼が父チンギスより与えられた支配領域とその民はジョチのウルス（領地、部衆）と呼ばれた⁸⁾。ジョチの次子バトゥによるキプチャク汗国の形成とは、このジョチのウルスの西方への大規模な拡大の結果にほかならない。

ジョチの血統者は、彼の息子たちの代よりいくつかの系統に分岐していった。そのなかでキプチャク汗国の解体期に汗位争いで中心的な役割を演じたのが、ジョチの第13子のトゥカ・ティムルの血を引く者たちである。14世紀末にあらわれ、キプチャク汗国にふたたび統一をもたらし、一時的に往時をほうふつさせるほどの勢いを取り戻させたトフタムイシ汗は、トゥカ・ティムルの家系の一員であり、ウルク＝ムハンマド、クチュク＝ムハンマド、サイド＝アフメドのいずれも、このトゥカ・ティムルの血統に連なっていた⁹⁾。

解体の歩みを進めつつあったキプチャク汗国におけるヘゲモニー争いにおいて、地理的に枢要の立場を占めたのが、ヴォルガ川の下流域である。モンゴルの西方遠征の指導者であったバトゥは、大汗オゴタイの死の報に接すると、ヴォルガ下流にサライ¹⁰⁾なる都市を築き、ここを拠点とするキプチャク汗国を建設した。歴代の汗の宮廷がおかれ、キプチャク汗国の政治的中心であったサライは、いわば中原の鹿であり、ここを誰がその掌中に収めるかは、同国における権力の所在、汗位をめぐる争いで優位に立っている者を如実にさししめす指標であった。

そしてもう一つ、ヴォルガ川の河口部には、ハジ＝タルハンなる都市があった。交易の拠点であり、後のアストラハンとして、大オルダからわかれたアストラハン汗国の首都となるこの町も、サライとならぶヴォルガ下流域の拠点であった。それゆえ、サライかハジ＝タルハンのいずれかに安定した基盤を確立し、そのうえで、もう一方をも自身の勢力下に収めれば、覇権争いにおいて決定的な優位に立つこととなる。ウルク＝ムハンマドとクチュク＝ムハンマドの争いにおいては、まさしくこの点が焦点となっていた。

キプチャク汗国の歴史的な中核部分であったヴォルガ下流域に対し、それ以外の地域はいかなる状況となっていたのであろうか。

キプチャク汗国の解体期、同国の東部、ヴォルガ川の東方に広がる地域には、マンギート族の遊牧集団であるノガイ・オルダが存在するようになった¹¹⁾。ノガイ・オルダは強盛を誇る遊牧勢力ではあったが、その始祖で、14世紀末から15世紀初めにかけてキプチャク汗国随一の実力者であったエディゲイが、チンギス汗の血統者でなかったため、彼の子孫であるノガイの首長たちは汗を名めることはできず、バクの名において配下の部衆を束ねる立場に甘んじることとなる。

このため、強力なノガイ＝マンギートの支持をいかにしてとりつけるかは、ヘゲモニー争いにおける主軸の一つではあったものの、汗の地位に就いて、ふたたび強力な君主権力を確立し、キプチャク汗国の分裂をおしとどめようとする動きは、主として西部にいたチンギス汗の血統者たちによって担われることになる。

一方、キプチャク汗国の北方や西方では、強国の形成によってあらたな国際情勢が醸成されつつあった。バトゥの遠征のころには諸公国ならびに各公国内の半独立勢力とも言うべき分領公国が叢生して四分五裂の状態にあったロシアでは、モスクワ大公国がめざましい勢いで勢力を拡大しつつあった。弱小勢力から出発して、しだいに力を伸張したモスクワは、ロシアの諸侯の盟主の地位である大公位を独占するようになった君主のもと、周辺の公国を併呑しつつ強大化の歩みを進めていった。

かくしてキプチャク汗国の北東に強大なロシア人の国家が出現しつつあったのとならんで、汗国の北西には、広大な東スラブの地を切り従えて大国化したリトアニアの姿があった。もともとバルト海の沿岸部からおこったリトアニアは、その後、南方のスラブ人地域に勢力をのばし、15世紀にはかつてのキエフ・ルーシの西部の大半を支配下におさめるようになった。とくに大公ヴィータウタス（ロシアではヴィトフト）の時代の1410年には、ポーランドと連合してグルンヴァルト（タンネンベルク）の戦いでドイツ騎士団を破り、東ヨーロッパ

の強国としての地位を揺るぎないものにした。

それではこうした東ヨーロッパの国際環境のなか、ウルク＝ムハンマド、クチュク＝ムハンマド、サイド＝アフメドの三人は、いかにしてタタール人勢力の頂点を目指したのであろうか。

2 サライの支配者たち

ウルク＝ムハンマドをはじめとして、キプチャク汗国の頂点の座をうかがう候補者たちが実際に汗位を獲得し、それを安定的に保持しようとするれば、以下にあげるような、いくつかの条件を備えておくべき必要があった。

1) しかるべき数の手勢を率いて旗揚げするための、よって立つべき地盤

2) 伝統的な有力氏族による支援の獲得

3) 新興勢力で、事実上独立のノガイ・オルダを形成しているマンギート族への適切な対応

4) リトアニアをはじめとする近隣の強国との同盟ないし協力関係の構築

第一に勘案すべきは、汗位への挑戦者自身がよって立つ地盤である。ウルク＝ムハンマドの場合、クリミヤ半島がそれに当たっていた。彼の先祖はつとに1260年代にはクリミヤ半島に根をおろしていたのである¹²⁾。この点、ウルク＝ムハンマドにとり、クリミヤは先祖伝来の、一族の固い基盤であるといえたが、その半面、ウルク＝ムハンマド自身がサライの王座について長期にわたってクリミヤを留守にすると、一族の他の誰かがクリミヤの支配権をうかがう可能性があった。実際、ウルク＝ムハンマドはクリミヤの支配をめぐり、同族たちとしばしばライバル関係に立ったのである。そして、結局、1440年代にはウルク＝ムハンマドの従兄弟のギアス＝アディンの息子のハジー＝ギレイによってクリミヤ汗国が建てられることとなろう。

自身の手勢に加えて、汗位を獲得・保持するのに必要な勢力を維持するために欠かせなかったのが、有力氏族の長たちによる支援である。キプチャク汗国の解体期に生まれたタタール人の諸汗国には、シリィン、パールィン、アルグィン、キプチャクの四つの名門氏族があった。タタール人社会のなかでは格別の

威信をもつ存在であったこれら有力氏族のなかでも筆頭の立場にあったのがシリンであった。

名門氏族シリンの首長テクネをはじめとするタタール人の貴顕の支持を得たウルク＝ムハンマドは、1419年にクリミヤを進発し、ヴォルガ川下流の拠点ハジ＝タルハンを掌握し、汗たることを宣した。

ただし、この時点ではまだ、ウルク＝ムハンマドの権力も盤石といえるようなものではなかった。彼の政権にとって、とりわけ懸念すべき材料となったのが、ノガイ・オルダ、すなわちマンギート族の動向である。ウルク＝ムハンマドの父のイチキリ＝ハサンについては、ノガイの祖エディゲイが苦境にあったとき、彼を敵方に引き渡しその死の因を作ったという言い伝えがあった¹³⁾。このため、エディゲイの子孫たちがベクとなって率いていたマンギート族のノガイ・オルダとウルク＝ムハンマドとの関係は、独特の緊張をはらんだものにならざるをえなかった。

はたして、このマンギートの軍事力を背景に、ウルク＝ムハンマドの覇権に挑んできたのが、これもまたトゥカ・ティムルの血統者で、キプチャク汗国の東部を根拠地としていたボラクである。ボラクは、エディゲイの長子で、父のあとをついでベクとなっていたマンスールを、汗につぐ顕職であるベクリヤリベク¹⁴⁾の地位につけ、1421年から22年の交にウルク＝ムハンマドを破って、彼をヴォルガ川流域から駆逐した。

敗れたウルク＝ムハンマドが頼ったのはリトアニア大公ヴィータウタスである。リトアニアで暫時、雌伏の時をすごしたのち、ウルク＝ムハンマドはボラクにたいする反攻ののろしをあげた。リトアニアの支援を受けたウルク＝ムハンマドは、1424年から25年の交にクリミヤで汗たることを宣し、ここからヴォルガ流域に向かい、1426年にはボラクに勝利して彼を東方へ追った。マンギートの不利をリトアニアでおぎなったというわけである。

その後もウルク＝ムハンマドとボラクの争いがしばらく続いたが、結局、前者が最終的勝利をおさめた。その間、マンスールを裏切りのかどで処刑したボラクは、マンスールの弟のガージーとナウルスを敵に回し、1428年から29年

の交に彼らに殺害されることになる。

かくして、敵手を葬り、権力を安定させたかに見えたウルク＝ムハンマドの新たな挑戦者として登場してきたのが、これもまたムハンマドの名をもつ、トゥカ・ティムルの血統者であった。この二人のムハンマドを区別するため、両者はそれぞれ「大なる、年長の」を意味するウルク、「小なる、年少の」を意味するクチュク（ないしキチ）をつけて呼ばれるようになる。すなわち、かねてより汗位争いで中心的な役割を演じていた方がウルク＝ムハンマド、こと大ムハンマド、新たに汗位争いに加わってきた方がクチュク＝ムハンマド、こと小ムハンマドというわけである。

1428年ころ上記のガージーとナウルスを味方につけたクチュク＝ムハンマドはハジ＝タルハンを自分の支持基盤としてウルク＝ムハンマドの権力を脅かす存在となった。しかし、ほどなくクチュク＝ムハンマドとガージー・ナウルスとの間に仲たがいが生じた。この結果、ガージーはクチュク＝ムハンマドのもとを去ったあと死亡、一方、ナウルスは配下の軍勢を連れてウルク＝ムハンマドの側に寝返った。これを多としたウルク＝ムハンマドはナウルスをベクリヤリベクに抜擢することになる。

ナウルスを旗下に加えたことによってウルク＝ムハンマドの権力は盤石になったかのようであった。基盤としてのクリミヤ、有力氏族の支持、隣国リアニアの支援と、これまでウルク＝ムハンマドの権力を支えてきた諸要素に加えて新興勢力のマンギートの軍事力さえ手に入れたのであるから。しかし、実際のところは、ナウルスの加入とベクリヤリベクへの抜擢はウルク＝ムハンマドの陣営の内部に大きなひびを生じさせる結果となったのである。

ウルク＝ムハンマドの旗揚げ以来、長年にわたって彼のかたわらにあって、その権力を支えてきたのは、タタールの有力氏族の中でも屈指の名族であったシリンの首長であるテクネやクングラト族の長ハイダルであった。古参の股肱であった彼らにとっては、新参のナウルスに対する優遇は、自分たちの功業を無視するかのようなふるまいであり、心中穏やかでいられたはずがない。にもかかわらず、ウルク＝ムハンマドは、その「なみはずれた高慢と傲岸不遜の

ゆえに」配下の者たちをなだめるところか、かえってその不満に油を注ぐようなまねをした、とはポチュカエフの評である¹⁵⁾。

はたして、ウルク＝ムハンマドは、ハイダルとはリトアニア関連の案件で、テクネとはモスクワ大公国の大公位争いをめぐる問題で、それぞれあつれきを起こし、両者の恨みを買う羽目となる。

ウルク＝ムハンマドに愛想尽かしをしたテクネとハイダルは、1432年彼のもとを去り、配下をひきつれてクリミヤにもどった。そればかりか、彼らはサイド＝アフメドをクリミヤの支配者として招き入れることすらした。ある意味、これは当然の行動であったろう。もともとクリミヤを地盤とするウルク＝ムハンマドが、ふたたびクリミヤに戻って、この地を隷下におくようになれば、自分を裏切ったテクネらに鷹懲の一撃を下すのが必至である以上、テクネらもウルク＝ムハンマドに対抗しうる人物にクリミヤの支配を委ね、その庇護下に入らざるを得なかった。そこで彼らが白羽の矢を立てたのがサイド＝アフメドというわけである。ここにいたって、本稿で主たる検討対象となっている三人の実力者のうち最後のサイド＝アフメドの登場となるが、彼のクリミヤ支配のその後のいきさつについては、次章で述べるとしたい。

テクネらの出奔に端を発する混乱とその後の勢力関係の再編を経て成立したのは、ウルク＝ムハンマド、クチュク＝ムハンマド、サイド＝アフメドのあいだの勢力均衡である。三者のうちいずれもが他を圧倒するだけの力を持っていなかったために、互いにけん制し合って動くに動けないという状態となった。誰かが他の一人を攻撃すれば、自身が第三の人物によって背後を突かれるかもしれない、という危惧が行動を掣肘したのである。

こうした三すくみの状態が1433-36年にかけて続いたのち、事態は一挙に新たな展開を見せる。1436年（ないし37年）ウルク＝ムハンマドのもとでベクリヤリベクの要職にあったマンギートのナウルスが彼のもとを去り、クチュク＝ムハンマドのベクリヤリベクとなったのである。

これによって大幅な戦力低下をきたしたウルク＝ムハンマドは、その後、サイド＝アフメド、クチュク＝ムハンマドにあいついで敗れ、壊滅的なダメ

ージをこうむる。サライを去った彼は、3000人の部衆を引き連れて北方へとおちのびていった。その後、ウルク＝ムハンマドはヴォルガ川中流のカザンを拠点とするカザン汗国を建設することになる¹⁶⁾。

ウルク＝ムハンマドが去った後、サライの主となったのは、彼の長年のライバルであったクチュク＝ムハンマドである。ヴォルガ川河口部の要衝ジ＝タルハンにくわえて念願のサライを支配下に入れたクチュク＝ムハンマドは、キプチャク汗国の中枢部であったヴォルガ川下流域を一手に領して大勢力を築くこととなった。

とはいえ、これまで述べてきた事情からうかがえるように、クチュク＝ムハンマドは草原世界の絶対的なあるじとなったわけではない。西方には、強力な遊牧勢力を従えたサイド＝アフメドがいた。以下、この実力者について見ていくとしよう。

3 草原の覇者

各種の歴史文献において、サイド＝アフメドが何者であるか記述するにあたって、まず指摘されるのは、彼がトフタムイシの近い縁者であった点である。先にも述べたように、トフタムイシは14世紀の終わりに出てジョチのウルスにふたたび統一をもたらした英主であった。中央アジアの雄であったティムールを一時は頼り、後には戦った人物としても知られており、その活動はユーラシアの広範な地域におよんでいる。

サイド＝アフメドの出自については、トフタムイシの息子という説と、孫であるという説がある。さらに後者の場合、トフタムイシの息子たちのなかの誰がサイド＝アフメドの父親であったのかという点でも、諸説が存在している。いずれにせよ重要なのは、解体化しつつあるキプチャク汗国にあって、サイド＝アフメドが単なる一地方勢力の長にとどまるのではなく、再統一の大業の担い手たろうとしたとき、彼の血統が持った意味である。偉大な父祖の後継者たらんとする自負と矜持、草原の人々から寄せられた期待・衆望、これらの点でサイド＝アフメドは、格別の立場にあったのであり、ウルク＝ムハンマドや

クチュク＝ムハンマドとは一線を画する存在であったといえよう。

血統の問題とならんで、サイド＝アフメドの際立った特徴をなしていたのは、リトアニアとの関係の深さである。サイド＝アフメドはリトアニア育ちであった。他のタタール人皇子たちとともに大公ヴィータウタスの宮廷で傳育された¹⁷⁾。1430年にヴィータウタスが死亡した後は、その従兄弟でリトアニアの新大公となったシヴィドリギェウォ（ポーランド王ヤギェウォの弟）に組するようになった。その後も、サイド＝アフメドはリトアニアの権力争いにかかわり続けることになる。

リトアニア育ちのタタールの御曹司であったサイド＝アフメドが覇権争いに参入してきたのは、1432年のことであった。ヴォルガ川の西方、南ロシアのステップで汗たるの名乗りをあげたのである。これを機に、彼を軸にして草原の情勢は動きだしていく。この年、ウルク＝ムハンマドのもとを離れてクリミヤにもどったテクネとハイダルは、サイド＝アフメドをクリミヤの新たな支配者として招いた。

前章でみたように、テクネらの行動は旧主ウルク＝ムハンマドによる報復を恐れて、頼りとなる後ろ盾を求めようとしたものであろう。だが、それにしても、表舞台に登場してきたばかりで、いまだその力量を測り知るような機会もなかったサイド＝アフメドにクリミヤの支配を託そうとしたのであるから、トフタムイシの直系子孫がもつ威光、光背効果の大きさに思いをいたさざるをえない。

サイド＝アフメドが登場しウルク＝ムハンマドやクチュク＝ムハンマドと肩を並べるようになった結果生じたのは、三者鼎立の状態である。三すくみで動くに動けないライバルたちのあいだには、しばらくのあいだ相対的な平穏が保たれた。それにつづいて起こったのが、ウルク＝ムハンマドの失墜であった。マンギートのナウルスに背かれたウルク＝ムハンマドの勢力が衰えたのを見たサイド＝アフメドは、すかさず彼を襲って破り、その部衆の多くを吸収した。かくして三強の一角が崩れた後、サイド＝アフメドとクチュク＝ムハンマドの対峙の時代が訪れる。

両者の力関係は、対峙の始まりからしばらくのあいだ、1430年代の後半から40年代の初めにかけての時期は、クチュク＝ムハンマド優位のうちに推移した。キプチャク汗国の建国以来の中核部分であったヴォルガ川下流をおさえていた強みであろう。

しかるに、1440年代半ばには、西方のサイド＝アフメドの方がヘゲモニーを握っている、と周辺諸国に見られるようになる。ポチェカエフは、この勢力逆転の背景として東方のアブル＝ハイル汗（ジョチの子シャイバンの子孫）の動向を挙げている。1440年代にアブル＝ハイルの攻撃を受けたクチュク＝ムハンマドが相対的に兵力を減殺したためである、と¹⁸⁾。両者の争いによって、言わば漁夫の利を得るかたちとなったサイド＝アフメドが勢力を伸張したというのである。

サイド＝アフメドの支配領域の核となる地域としてトレパヴロフは、東はドン川、西はドニエプル川、南はクリミヤ半島と本土とをつなぐベレコプ地峡、北はドン川の左側（＝北側）に注ぐ支流群、ないしオカ川をあげている¹⁹⁾。本領にあたるこれらの地域に加えて、クリミヤ半島までも勢力下に収めていたのであるから、この時期のサイド＝アフメドは、解体化しつつあるキプチャク汗国の西部における最強勢力と呼ぶべき実力を備えていたといえよう。

黒海北岸の草原を地盤に強力な遊牧勢力を従えるようになったサイド＝アフメドは、父祖の偉業の再現者としてキプチャク汗国の統一への歩みを進めつつあるかのようであった。その実現のために、彼が次なる勢力拡大の対象とすべきは、当然のことながら、東方であったろう。クチュク＝ムハンマドを駆逐して歴代の汗の居所サライを含むヴォルガ川下流域を手中にしたあかつきには、自他ともにゆるす草原地帯の覇者の誕生である。

にもかかわらず、サイド＝アフメドが主たる関心を寄せ、その軍勢を率いて向かった先は東ではなく、西北のリトアニアであった。

おりしもリトアニアは、大きな転機を迎えつつあった。ポーランドとの有名なヤギェウォ連合の行方である。1386年にリトアニアの君主ヤギェウォとポーランド女王ヤドヴィガとの結婚で成立したヤギェウォ連合は、のちにこそ同君

連合、国家の合同へと進展していくものの、連合成立当初は、ヤギェウォー族の成員をそれぞれに君主として戴く二つの国の緩やかな結びつきにとどまっていた。ポーランド王ヴワディスワフ2世となったヤギェウォの時代、リトアニアは彼の従兄弟であった大公ヴィータウタスのもとに東欧の強国として確固たる存在感を示していたのである。

事態が変わるのは、ヤギェウォの息子のヴワディスワフとカジミエシの兄弟の時代である。ポーランド王ヴワディスワフ3世となっていた兄が対トルコ十字軍で1444年に戦死したため、すでにリトアニア大公となっていた弟のカジミエシがポーランド王（在位1447-92年）となり、二つの国が一人の君主の支配下におかれることになった。

問題は、この唐突に実現した同君連合がリトアニアの貴族の一部に強い不満と危機感をいだかせたことである。独自の君主を擁する自立したリトアニアを標榜する彼らは、ヴィータウタスの甥をあらたな大公候補に押し立てて反カジミエシの戦いに突入した。これにサイド＝アフメドが加担したのである。結果として、このリトアニアの内訌への介入がサイド＝アフメドの没落をもたらすことになる。

1447年ころはじまったカジミエシとリトアニア自立派の戦いにおいて、後者に組したサイド＝アフメドは数度にわたってリトアニアを襲撃、翌48年には、当時リトアニア領であったウクライナのキエフを襲って甚大な被害をもたらした。しかし、結局、リトアニア自立派とサイド＝アフメドはカジミエシとの戦いに敗れることになる。さらに、サイド＝アフメドは、この争いに際してカジミエシの側についたモスクワ大公国を攻撃して敗れたため、当時の北方の強国であったポーランド＝リトアニア、モスクワのすべてを敵に回すという逆境に陥った。

そればかりではない。南方のクリミヤ半島までがサイド＝アフメドの掌中から失われていくことになった。前述したように、クリミヤは1432年にウルク＝ムハンマドのもとを去ったテクネらによってサイド＝アフメドがあらたな支配者として招かれた地域である。この時、サイド＝アフメドによってクリ

ミヤを追われた者たちの中にハジー＝ギレイなるタートル人の皇子がいた。リトアニア問題でサイド＝アフメドと敵対関係に入ったカジミエシがサイド＝アフメドのクリミヤ支配にくさびを打ち込むべく白羽の矢を立てたのが、このハジー＝ギレイであった。

カジミエシの支援を受けたハジー＝ギレイは、故郷のクリミヤに進攻した。これに対し、かつてサイド＝アフメドを招致したテクネは、このたびは彼を裏切ってハジー＝ギレイの側につき、1449年ハジー＝ギレイはクリミヤの汗となる。名門氏族シリンの長であったテクネの動向にバルインら他の名族もならなかったため、クリミヤにおけるハジー＝ギレイの権力基盤はゆるぎないものになっていく。

ハジー＝ギレイは、ウルク＝ムハンマドの従兄弟ギアス＝アディンの息子であり、クリミヤで長く支配の根を張って来た一族の一員であった。その点では、クリミヤは、一時サイド＝アフメドの勢力下にはいったものの、結局、伝統的な支配秩序に復したともいえよう。その後、ハジー＝ギレイの子孫たちは長らくクリミヤ汗として、この地に君臨することとなる。

かくして、南北から挟撃されるようになったサイド＝アフメドは、敗れて逃亡する。彼が敗残の身を寄せた先はキエフであった。リトアニア育ちでかの地に知己も多かったサイド＝アフメドとしては、草原世界の實力者であった自分はポーランド＝リトアニアの支配層にとって軽々にあつかえない相手であり、いまだ十分利用価値がある人物として遇されると考えていたのであろう。しかし、現実にサイド＝アフメドが受けた対応は、あくまでポーランド＝リトアニアに仇をなした敵としてのそれであった。捕らわれて鎖に繋がれた彼はコヴノ（現在のリトアニアのカウナス）に護送され、その地で1455年ころ生涯を終えたのである²⁰⁾

おわりに

14世紀末から15世紀初めにかけてキプチャク汗国は、一時的に統一の相を取り戻す。14世紀の末に君臨したトフタムイシ、その後みずからは汗位につかな

かったものの実質的な支配者として汗国を牛耳ったエディゲイの両名が、復興の立役者であった。しかし、トフトムイシが1406年、エディゲイが1419年に死亡した後は、キプチャク汗国の分裂傾向はやむことなく、1430年代末から1440年代にかけカザン汗国、クリミヤ汗国があいついで成立すると諸汗国の分立状態が確定的となる。こうした諸勢力の分立のなかで相対的な優位性をそなえた存在であり、それがためにキプチャク汗国の後継者とみなされたのが大オルダである。

1419年のエディゲイの死からカザン・クリミヤ汗国の建設までのあいだは、諸勢力の併存という体制が生成・確立していく時期であった。そして、これこそがウルク＝ムハンマド、クチュク＝ムハンマド、サイド＝アフメドの活躍した時代にほかならない。三者のなかで最初に歴史の舞台に登場してきたのはウルク＝ムハンマドであり、地盤であったクリミヤを進発してサライをおさえ、汗位についた。ついでヴォルガ川下流域の支配をめぐるウルク＝ムハンマドとクチュク＝ムハンマドが南北に対峙、その後、西方にサイド＝アフメドがあらわれると、三者が鼎立、最終的にはサイド＝アフメドとクチュク＝ムハンマドの東西対立の時代となる。

複数勢力が競いながら東西南北に並立する、こうした流動的な状況変化の中で、その時々最強者、均衡する力関係のなかの重心の位置にあったものが「大オルダ」の汗である。何か特定勢力の長であるよりも、諸勢力のなかの相対的な首位者こそが、その地位にある者とみなされたのである。それは、キプチャク汗国の伝統的な中核部分であったヴォルガ川下流域をおさえたウルク＝ムハンマドやクチュク＝ムハンマドであっても、西方の草原地域の支配者であったサイド＝アフメドでもよく、この点で、大オルダの最初の汗として、この三人の名前があげられるのも故なしとしないのである。

その後、こうした権力関係が錯綜する星雲状態は、しだいに整理され、いくつかの明確な特徴を持った集団が形成されていく。ヴォルガ川中流のカザンを拠点にウルク＝ムハンマドの子孫を汗として戴くカザン汗国、クリミア半島を基盤にハジー＝ギレイの子孫が代々の汗となったクリミヤ汗国。これらお

よび、すでにヴォルガ川の東方に成立していたノガイ・オルダによって地理的にくっきりとした輪郭を与えられたのが大オルダであり、クチュク＝ムハンマドの子孫がサライを拠点に君臨した。

地理的な枠組みと王朝家門という基準によって明確な特徴が浮き彫りにされると、それは以後も継続することになる。草原地帯のどこを拠点にしようとも最強勢力であるならば大オルダの汗とみなされる、ということではなくなってくる。1502年のクリミヤ汗メングリ＝ギレイの襲撃によって大オルダが滅亡したとされる出来事は、ウルク＝ムハンマド、クチュク＝ムハンマド、サイド＝アフメドラが活躍した往時ならば、勝利者のメングリ＝ギレイがあらたな大オルダの汗となったという、とらえ方をするのも可能であったろうが、16世紀初めの時点では、事態はあくまでクリミヤ汗国の覇権と大オルダの滅亡として受けとめられたのである。

注

- 1) 14世紀にはじまるモンゴルのロシア支配、すなわち「タタールのくびき」については、栗生沢猛夫『タタールのくびき ロシア史におけるモンゴル支配の研究』（東京大学出版会、2007年）ならびに、Charles J. Halperin, *Russia and the Golden Horde: The Mongol impact on medieval Russian history*, Indiana University Press, 1985参照。
- 2) В.Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. Очерк истории. Тула, 2010.
- 3) Там же. с.4.
- 4) 「タタールのくびき」の終焉については、В. В. Каргалов. Конец ордынского ига. М.,2011参照。
- 5) В.Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с.4.
- 6) 1502年のメングリ＝ギレイの勝利については、В.Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с.90-91参照。
- 7) В.Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с.5.
- 8) ジョチの子孫たちとジョチ・ウルスに含まれる諸国の支配のあり方については、赤坂恒明『ジュチ裔諸政権史の研究』（風間書房、2005年）参照。
- 9) トウカ・ティムルの血統者たちの系図については、Р. Ю. Почкаев. Цари ордынские. Биографии ханов и правителей Золотой Орды. СПб., 2012. с. 404 参照。
- 10) バトウがサライを築いた後、弟のバルケがヴォルガ川のより上流に同名の都市を建設し、こちらは新サライあるいはバルケ＝サライと呼ばれた。

ロシア史における大オルダ（中村）

- 11) ノガイ・オルダについては、Б.-А.Б. Кочкаев. Ногайско-русские отношения в XV-XVIII вв. Алма-Ата, 1988., В.В. Трепавлов. Орда самовольная: кочевая империя ногаев XV - XVII вв. М., 2014 参照。
- 12) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские.с.228.
- 13) Там же.
- 14) ベクリヤリベクは、ロシアの史料では「公たちの公」と記される枢要の地位であり、伝統的に左右両翼体制をとっていたキプチャク汗国においては、左翼を汗自身が、右翼をベクリヤリベクが率いていた（Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство: 1445-1552 : очерки истории. Казань.2009. с. 71）。
- 15) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские.с.233.
- 16) カザン汗国については、J.Pelenski, *Russia and Kazan: conquest and imperial ideology (1438-1560s)*.1974参照。なお同国の建国については、ウルク＝ムハンマドではなく、彼の息子のマフムーテクこそが真の建国者とみなされるべきという説もある（*Ibid.*, pp.23-24）
- 17) ТРЕПАВЛОВは、САИД＝АФМЕДがリトアニア育ちであったばかりか、生まれさえリトアニアであった可能性があるという（В.Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с.47）。
- 18) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские.с.247-48.
- 19) В.Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с.48.
- 20) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 251.